

# 『東医宝鑑』と韓国の韓医学

金 南 一

韓国 慶熙大學校 韓医科大学 医史學教室

翻譯：金 英 信

京畿道 城南市 金英信 韓医院 院長

## 1. 序 論

韓国では『東医宝鑑』は非常に重要な本であります。この本の著者である許浚(1539-1615)は国民的英雄として推仰を受け、彼の著書である『東医宝鑑』は韓国を代表する国際的医書だと自負しております。健康と関連した書籍を書くとき、製薬会社などで自社の製品を宣伝する時、また健康関連TV番組でも恒例的に『東医宝鑑』に出てくる関連句節を引用しているのを見ると、韓国でこの本がどれだけ公信力のある書籍であるかを物語っています。『東医宝鑑』に対する韓国人の信頼は決して短期間で作られたものではなく、長年の間の内在化過程を通じて熟成し作られたものだ。

このような理由から韓国の韓医学を理解するためには『東医宝鑑』自体に対する理解と『東医宝鑑』が作ってきた歴史に対する理解を先行させる必要があります。ここに本稿では『東医宝鑑』の著者許浚、編撰過程、内容と構成、意義、"東医"の意味、後世に及んだ影響の順序で論じたいと思います。

## 2. 『東医宝鑑』の著者 許浚(1539~1615)

『東医宝鑑』の著者 許浚(1539~1615)は 字が 清源で 雅号は 龜岩だ。高麗 太祖の時 孔

巖村主になった 陽川許氏の 始祖 許宣文の 20代孫として 生まれた。彼は 朝鮮時代 貴族に属する 武班の子弟で 生まれはしたが 庶子であったため 医師の道を選択したのである。彼は 宮中で 御医として活動しながら 何回も功を立て そのごとに官職が高くなった。またその 能力を認められ いろいろな医学上の貢献をも成し遂げた。このような努力は 末年にさまざまな 医書の出刊で 結實を結んだ。彼が 生涯 著作した本は 『諺解胎産集要』(1607年:69歳)、『諺解救急方』、『諺解痘瘡集要』(以上 1608年:70歳)、『東医宝鑑』 完成(1610年:72歳)、『纂図方論脈訣集成』(1612年:74歳) 『新纂癖瘧方』, 『癖疫神方』(以上 1613年:75歳) 等 7種にのぼる。彼は このように多くの 医書を 著述しながら 學術的に大きな貢献をした。

彼が 『東医宝鑑』の 編纂のような 大きな 國家事業を 受け持てる 機會に 恵まれたのは それまで積み上げた 彼に對する 周囲の信頼のためだった。彼は 學術的 能力のみならず 臨床的 能力でも卓越していた。特に、1590年に 王世子である 光海君の 痘瘡を 治癒させた事は 彼の能力が 認められる 重要な 事件になった。1592年には 壬辰倭亂が勃發し 王である 宣祖が 義州に避難する時も そこまで一緒に隨行して 深い信頼を受けた。このような 信頼は 1596年に 『東医宝鑑』編纂の 作業を 始めるのに 大きな 助けになった。

下に 許浚 関連 年表を 記録する。

### 《 許浚 年表 》

- 1539年(出生) 許の 庶子で生まれる。
- 1571年(33歳) 許浚の 官職が 從4品 内医院 僉正という 最初の 記録
- 1575年(37歳) 許浚が 王を 診療した 最初の 記録
- 1581年(43歳) 『纂図方論脈訣集成』の 校正を終わらせる
- 1590年(52歳) 王世子の 病を 治療した 功勞で 通政大夫 正三品の 爵位を受ける
- 1592年(54歳) 壬辰倭亂が勃發して 宣祖を 義州まで 隨行
- 1596年(58歳) 東宮の 病を 治療した 功勞で 正二品 正憲大夫の 爵位を受ける  
宣祖の 命令を受けて 『東医宝鑑』の 著述を 始める
- 1600年(62歳) 楊禮壽の 死
- 1601年(63歳) 内医院 首医だと 言及した 記録が 有る

- 『診解救急方』と『診解胎産集要』『診解痘瘡集要』を編纂する。
- 1604年(66歳) 義州まで 宣祖を 隨行した 功勞で 扈聖功臣の 爵位を受ける  
従一品 崇録大夫になる
- 1606年(68歳) 正一品の 爵位を 下賜しようとしたが 臣下の 反對で 取消になる
- 1607年(69歳) 『診解胎産集要』を 刊行
- 1608年(70歳) 『診解救急方』、『診解痘瘡集要』を 刊行  
宣祖 昇遐の 責任を 取って 義州に 流配
- 1609年(71歳) 流配を 解かれる
- 1610年(72歳) 『東医宝鑑』 完成
- 1612年(74歳) 『纂図方論脈訣集成』 出刊
- 1613年(75歳) 『東医宝鑑』の 刊行。『新纂癘瘟方』『癘疫神方』を 刊行する。
- 1615年(77歳) 享年 77歳で 逝去。 正一品 輔國崇録大夫の 爵位を 追贈

### 3. 『東医宝鑑』の 編纂過程

『東医宝鑑』は 宣祖の 命令によって 1596年に 許浚が 鄭碯、楊礼壽、金応鐸、李命源、鄭礼男 等と一緒に 編纂を始めた。しかし翌年に 丁酉再亂が起り 編纂に参加した 医師が みんな ばらばらになり 途中で 中斷してしまった。そのため 宣祖が 許浚に一人で 編纂することを 命令し 内医院に 保管してある 500余卷に達する 医書を 自由に閲覽できるように 配慮してくれたおかげで 許浚が一人で 編纂を 繼續できるようになった。しかし 診療と 首医としての多くの 役目などで忙しく 編纂は 思うようにはかどらず あれこれと時間だけ浪費する状態であった。そんな中で 1608年に 宣祖が 昇遐して 首医が その責任を取り 流配される 慣例に従って 義州に 流配されたが かえて 流配地で 執筆に没頭できる 機会を持てるようになった。光海君が 王になった 2年後である 1610年に 完成し 王に 見せたところ 王は これを見て 感慨無量で居られたという 記録が 朝鮮王朝實錄と 『東医宝鑑』序文から 伺える。このように 『東医宝鑑』編纂は 朝鮮の 歴史的過程と 密接な 関連性を持って 進められた。この事業を やり遂げられた背景には 許浚 個人の 能力のみならず 当時 朝鮮中期の 醫學的水準も かなり 影響したものと見られる。

## 4. 『東医宝鑑』の 内容と 構成

『東医宝鑑』はさまざまな面でその 優秀性が引き立つ。それには まず 体系的な 項目選定が あげられる。この本は 内景篇、外形篇、雑病篇、湯液篇、鍼灸篇の 五つの 篇で構成されている。4巻で 構成された 内景篇では 人体内部の 問題を 重点的に扱っているという点で 生理學との 関連が見られる。最初に 1巻では 身形、精、氣、神という 題目 の下に 道家で 人体生理の 基本単位として 扱われていた 精、氣、神 三種類の 作用を 説明し ここに 治療法も 添加してある。これは 『東医宝鑑』が 他の医書と 區別される点のうち 一つだ。すなわち、道教で 使用している 概念を 醫學的に 收容している という点で 獨創的だといえることができる。2巻では 血、夢、聲音、言語、津液、痰飲 など 人体内部の 状況を 反映するものを 題目に 設定している。人体内部の 血は 外に 出血するときの 多くの 様相によって、夢は その 内容の 解讀を通して、聲音・言語 等は その 高低、長短、様態 等で、津液・痰飲 等は その 分泌される 模様と 場所によって 人体内部の 状況を 把握する 基準に 成り得るものだ。3巻では 人体内部の 臓器である 五臟六腑を 論じている。五臟は 肝臟、心臟、脾臟、肺臟、腎臟の 順で、六腑は 胆腑、胃腑、小腸腑、大腸腑、膀胱腑、三焦腑の 順で その 位置と 容量、機能、疾病、治療法 等を 記録している。3巻の 末尾に 胞、虫を 添加したことも 特異である。子宮を 五臟六腑の後に置いて たとえ 子宮が 五臟六腑に 屬しては ないが、その 重要性においては 五臟六腑に 劣らないと 主張しているのだ。最後の 4巻では 小便と 大便という 題目で 排泄物を 扱っている。小便と 大便は 人体内部のものが一番最後に 處理された 終末處理物なので 内景篇の 終わりに 位置付けたように見える。

内景篇に引き継ぎ 4巻で 構成された 外形篇では 人体の 外部にある 器官らを 扱う。1巻と 2巻にかけて 頭、面、眼、耳、鼻、口舌、牙齒、咽喉、頸項、背 など 頭頂から 背部までを 扱っている。次の 3巻と 4巻では 胸、乳、腹、臍、腰、脇の 順序で 降りてきた後、引き継いで 皮、肉、脈、筋、骨 など 外部から 内部につながる 人体組織を 観察し 次に 手、足、毛髮、前陰、後陰の 順で 証状と 治療を 扱っている。

外形篇に續き 疾病を 扱っている 11巻で構成された 雑病篇がある。『東医宝鑑』では 疾病に對する 正確な 知識がなければ ちゃんと 疾病を 診斷することができないと 判斷し 雑病篇の 初めの 1巻で 診斷と治療の 大原則を 体系的に 敘述している。これは 現在でも 醫師なら必ず 精通しなければならない 内容だ。2,3,4巻にかけては 外部の 邪氣である 風、寒、暑、濕、燥、火と 内部から 發生する 疾病の 内傷、虚勞を 論じながら 疾病の 原因に 焦点を 合わせて

いる。續いて 5,6,7,8巻では 当時 有り勝ちだった 疾病を 羅列し、説明している。ここに 記録されている 疾病には 霍亂、嘔吐、咳嗽、積聚、浮腫、脹滿、消渴、黄疸、 瘵瘡、温疫、邪祟、癰疽、諸瘡 などだ。9巻では 日常生活で 必要な 医学知識を 中心に 記録してある。諸傷、解毒、救急、怪疾、雜方 などがそれだ。10巻と 11巻はそれぞれ 婦人と 小児について 総合的に深く扱っている。

雜病篇に引き継いで 3巻で 構成された 湯液篇と 1巻からなる 鍼灸篇がある。この二つ篇は 治療に 関係した 薬物と 治療法を それぞれ扱っている。

五つの篇が 羅列された 順序を見ると この本では まず 内景篇で 人体の 内部を扱った後 外形篇で 外部に 對して 論じ 先に 内外を 論じた後に 内外の 不調和によって 發生する 疾病を 雜病篇で扱っている。そしてこの 疾病らを 治療する 手段として 湯液と 鍼灸を 湯液篇と 鍼灸篇で扱っているのだ。この様にみても『東医宝鑑』は 目次を 通して 醫師は必ず 人体の 内部と 外部を 把握する必要があり 疾病が 發生した後には その原因と証状をよく 把握して 治療に 臨まなければならないというメッセージを 私たちに伝えているのだ。

このように『東医宝鑑』の優秀性の中で 一番 優秀だと言えるのは 体系的な 項目選定と 論理展開だと言える。これは 他の医書には 見当たらない『東医宝鑑』だけが持っている 獨創性と 優秀性を 示しているものだと言っても 過言ではない。

そして 各項目ごとの終わりに 單方療法を記録して 貧しい庶民も 安く 簡単に 治療が受けられるように 配慮してある点も この本の活用度を 高めるものだと言える。一つの 薬物だけで 疾病を治療することができる 方法を提示したことは 周辺の 山野に散らばっている 野生韓薬材の利用を 促進させることでもあるので 医学の大衆化にも 寄与したと言える。

また 湯液篇で薬物の 漢字名の下に ハングル表記(これを "郷薬名"という)を 併記して 韓國産 薬材の 利用を 促進させた事も 高く評価される点だ。以前まで 唐薬という名前で 中國産 薬材が多く利用される事もあったが その量が 極めて 制限的であったため 一般庶民達は 使用することが 困難であった。薬物に對するハングル表記は 韓薬に對する 一般庶民の 親密度を高め くれるだけでなく その 栽培 及び 需給も 容易になると言う事なので 薬材の 単価を下げ 低価な 韓薬材の 供給を 可能にする 貢献をした。

## 5. 『東医宝鑑』の意義

1596年から 1610年まで 15年に渡る 刻苦の 努力により 作り上げられた 『東医宝鑑』は

それ以前の 韓醫學の 内容を 自身の 見解によって 一目瞭然に 整理した。 百科辭典の性 格の 綜合医書だ。目次 2卷、内景篇 4卷、外形篇 4卷、雜病篇 11卷、湯液篇 4卷、鍼灸篇 1卷 の 合わせて 25卷からなる この本は、いくつかの面で 優秀性が引き立つ。まず、養生の 概 念を 醫學に 具体的に 適用させている。 第二に、各 醫學流派の醫學思想を 一つの統一した体 制で 一目瞭然に 表している。 第三に、純粹なハングルで 郷藥名を 表記し 國産藥材の 活用 を 容易にした。 第四に、論理的な体制で 構成された目次は 体系的な醫學學習を 可能にして くれるだけではなく 實際 臨床での 活用性を 高めてくれた。

『東医宝鑑』の 偉大性はすぐれた体系にある。『東医宝鑑』は ある疾病を 治療するために 知らなければならない醫學理論を 疾病名の後に 羅列 説明し、これらを鑑別する 診脈法を そ のすぐ後に 記載した。その次に 處方を 羅列させて 最後に 單味處方、鍼灸法、養生法 等を 記録する 形式を 取をとった。

『東医宝鑑』は 民族醫學の新しい 伝統を 樹立して 東醫學の 名譽と 矜持を 高めた。そし て この本を通じて 韓國醫學は 独自の伝統の中で發展した 醫學であることを 滿天下に 公開す るようになった。本の題目に "東医"という單語を使ったのは 宜土性を強調する 身土不二思想に 通じる。1749年 趙廷俊が 著述した 『及幼方』にもこのような思想が 継承されているのが 見られる。『及幼方』の "東方六氣論"では "我が國は 大陸の一角にかたよっているので その 氣候、風土が 中國とは違う。東垣、丹溪のような人々が 我が國にいたとしたら 必ず 我が國 の 經と 固有の 氣候に 適應する 著作があったはずで 用藥の 標準が作られたはずだ。"と言っ ているのが それだ。中國人 凌魚は 乾隆 31年(1766年)に 中國で 刊行された 『東医宝鑑』の 序文で 『東医宝鑑』を "天下の 宝"と譽めている。

## 6."東医"の意味と 韓医学

許浚が 直接書いた 『東医宝鑑』集例には 次のような文がある。

"王節齋有言曰、東垣、北医也。羅謙甫傳其法、以聞於江浙。丹溪、南医也。劉從厚世其、以鳴於陝西。云則医有南北之名尙矣。我國僻在東方、医藥之道不絶如線、則我國之医、亦可謂之東医也。鑑者、明照万物、莫逃其形。是以元時羅謙甫有衛生宝鑑、本朝 信有古今医鑑、皆以鑑爲名、意存乎此也。今是書披卷一覽、吉凶輕重皎如明鏡、故遂以東医宝鑑名之者、慕古人之遺意云。

ここでは "東医" という 意味が 北医と 南医に 対応する 医学的伝統のある 医学として 記述されている。そして "宝鑑" という 単語の 使用は 『衛生宝鑑』, 『古今医鑑』を 例にして 説明した。"東医" という 単語の 使用は 朝鮮人の 体質に合う 医学を作り出そうと 行なわれた それ以前の 歴史的な努力を 一度に 集積させたという 意味を 強調しているのだ。

## 7. 『東医宝鑑』が世に及ぼした影響

初めに、医学の恩恵が庶民にも すべて 与えられるようにという意図は ある程度

後世にも伝わって 成功的だったと考える。『東医宝鑑』が 編纂された後の 朝鮮後期は 医学が 民衆の中に 深く入り込み 民衆医療の 時期だと 評価されている。医学と 薬物知識の 広範囲な 伝播、薬物使用 風土の 定着、民衆らの 経済的向上などが それによる 肯定的 効果として 見られる。

二つ目は、朝鮮前期に力を入れた 郷薬の 普及、中国医書の 収集と 編纂 等を通じて 磨かれた 朝鮮医学の 潜在力を 發揮させ その 實を結ぶ事により 臨床医学の 飛躍的發展が 可能であったことだ。これは 朝鮮前期 世宗年間に 成し遂げた 医学的努力の 賜物である。世宗年間に 成し遂げた 『郷薬集成方』, 『医方類聚』, 『郷薬採取月令』などの 医書の編纂は 朝鮮開國初期の医学を 整理して 國家發展の基礎を作り出そうとする 努力でもあったが、これらの 成果のおかげで 朝鮮の医学は 飛躍的發展をする事が出来た。これらが 『東医宝鑑』によって 定理解される事により 臨床医学の發展につながるようになった。

三つ目、『東医宝鑑』の 出刊で それまで 主導的位置を占めていた郷薬が 衰退してしまった 傾向が 無いとは言えない。仁祖 11年(1633年)に 訓練都監活字で 重刊された 『郷薬集成方』に 載っている 崔鳴吉の跋文には 当時の郷薬の状況が よく現れている。"証状を察して 処方するに至り 皆 新たに出た 中国處方を 主に使用して 郷薬處方は 遂には 捨てられ 使用されない。"という件がそれだ。これは 1433年に 『郷薬集成方』が初めて出た時の状況と 1633年 重刊になった時の状況が 変わっていたという点を 言っているのと同時に 1610年 に 『東医宝鑑』が 刊行された後の状況を 語っている事にもなる。すなわち、『東医宝鑑』が 刊行されてから 20 余年が経った 1633年頃には 郷薬関連医書に出てくる薬物を 飛び越えて 『東医宝鑑』に出てくる どんな處方も こなせる位の 医学的状況が 朝鮮に作られていたということだ。

四つ目、『東医宝鑑』は 以後 韓國韓医学を 主導して行くことで 韓國韓医学 發展の

基礎になった。多分 『東医宝鑑』以後に出た 医書は ほとんど 『東医宝鑑』と 関連があると言っても 過言ではないだろう。1790年に出た 『廣濟秘笈』、1799年に出た 『濟衆新編』、1884年に出た 『方藥合編』等は 皆 『東医宝鑑』と密接な関係がある書籍で 数多くの医家達が 読んできた医書だ。それだけでなく 四象医学説を扱っている 李濟馬の『東医壽世保元』もその 基礎になっているテキストは 『東医宝鑑』である。 現在 韓國の 韓医科大学で 使用している 教科書は 『東医宝鑑』を 基本にしており つまり このような伝統は 現在まで續いているといえる。

## 8. 結 論

韓國の 医学的伝統を 理解するためには 『東医宝鑑』に 對する 理解が 最優先である。韓國人の底辺に 引かれている 許浚と 『東医宝鑑』に對する 自負心は 長年の歴史の中で作られたものだ。 一冊の 医書でしかない 『東医宝鑑』に 全國民が これほど 熱狂するのは韓國人の 体質に合う 医学を作り出そうとする 韓國人の 努力が この一冊の中に 集約されているからだ。